

大江町埋蔵文化財調査報告書 第2集

K-691

山形県西村山郡大江町

# 左沢楯山城遺跡調査報告書

1999

大江町教育委員会

大江町埋蔵文化財調査報告書 第2集

山形県西村山郡大江町

**左沢楯山城遺跡調査報告書**

1999

大江町教育委員会

## 序

当教育委員会では、この「左沢楯山城」についての調査を始めて6年目を迎えます。6年目にして、本調査について国庫補助を受けられることになり、調査に大きなはずみを得て進められることに感謝しています。本報告書は、本年度調査したことをまとめたものであります。

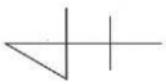
「左沢楯山城」は、中世の山城として築城され、南に県の母なる川—最上川、東から北は渓谷と断崖という天險を利用した自然の要塞と言われています。4地区（A～D）から成る左沢楯山城は、その広大な規模からしても、また、山と川の両面を掌握する拠点としても注目に値するものと専門家から評価されています。今は、周りの樹木の繁茂にまかせた千畳敷や寺屋敷に立つ時、往時の人々の息づかいを感じ、限りないロマンを覚えます。

本調査の進展によりいろいろな史実の解明がなされることを大きく期待するものであります。

この調査の実施から報告書の刊行に至るまで、種々ご指導ご助言を賜りました調査委員の方々、並びに関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

大江町教育委員会

教育長 清野昭一郎



左沢楯山城遺跡全景

## 例　　言

1. 調査名 左沢楯山城遺跡発掘調査

2. 調査期間 左沢楯山城遺跡B地区千疊敷・堀切部分 1998年7月31日～8月26日

左沢楯山城C地区寺屋敷 1998年11月2日～11月9日

3. 調査面積 B地区千疊敷540m<sup>2</sup>、C地区寺屋敷465m<sup>2</sup>

4. 調査体制

・調査主体 山形県大江町教育委員会

・発掘調査指導 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館長 川崎 利夫

・執行体制 左沢楯山城遺跡関連調査委員会

顧問	入間田 宣夫	東北大学東北アジア研究センター教授
委員長	伊藤 清郎	山形大学教育学部助教授
副委員長	高山 法彦	大江町文化財保護委員会委員長
事務局長	鈴木 熊	西村山地方事務所県少年指導専門員
委員	北畠 敏爾	河北町文化財保護審議会委員
委員	金山 耕三	山形県立荒砥高等学校校長
委員	岩田 康信	岩手県立大学森岡短期大学部国際文化学科助教授
委員	大場 雅之	財団法人山形県テクノボリス財団
委員	松田 進	大江町文化財保護委員会副委員長
委員	香沢 喜代次	大江町文化財保護委員会委員
委員	大曾 安太郎	大江町文化財保護委員会委員
委員	柏倉 昇	大江町文化財保護委員会委員

・事務局

山形県大江町教育委員会社会教育課

課長 小原 良之

係長 結城 順二

主事 日下部 美紀(現場担当)

非常勤 村上 宗紀(現場担当)

5. 実測及びトレース

柏倉 昇・林 善美・日下部美紀・奥山 伸行・古保 智洋

6. 繩張図作成

岩田 康信・大場 雅之

7. 造構写真撮影

西田 正広・村上 宗紀

航空写真撮影

アジア航測株式会社

8. 土壌分析

山形大学理学部地球環境学科教授 山野井 薫

9. 本書の執筆

第1章 鈴木 熊

第2章 川崎 利夫

第3章 大曾安太郎

第4章 岩田 康信・大場 雅之

第5章 伊藤 清郎

10. 現地調査における参加者は下記のとおりである。

大江町高齢者事業団

安全就業指導員

太田 進

作業員

白田耕作・松田和雄・林 重好・古城 博・林 平司・木村政男・佐藤力也

佐竹 啓・小松繁太郎・会田源吉・佐直常太郎・古川鶴雄・阿部廣志

11. 繩張図に伴う矢竹伐採

西村山地方森林組合

12. 調査における図面・写真・遺物はすべて大江町教育委員会で保管している。

# 本文目次

# 図版目次

## 第1章 左沢楯山城の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境	1
1. 立地	1
2. 環境	2
第3節 周辺遺跡と歴史的環境	3

## 第2章 千畳敷とB1地区発掘調査

第1節 調査方法と調査経過	5
第2節 千畳敷の発掘	6
1. 虎口付近の調査	7
2. 掘立柱穴群と建物の構成	9
3. B1C地区地下室	11
4. 千畳敷の全体像	13
第3節 B1地区堀切部分の発掘	14
第4節 出土遺物	17

## 第3章 寺屋敷試掘調査

第1節 遺跡の立地と環境	18
第2節 調査の概要	18

## 第4章 繩張図調査

1. 千畳敷周辺の繩張図	21
2. 寺屋敷周辺の繩張図	23

## 第5章 成果と課題

1. 今年度調査の成果	25
(1) 発掘調査の成果	25
(2) 繩張図調査の成果	25
2. 次年度以降調査の課題	26
(1) 発掘調査の課題	26
(2) 繩張図調査の課題	26

第1図 大江町主要部と遺跡位置図	2
第2図 調査概要図	3
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡	4
第4図 千畳敷全体トレンド設定図	6
第5図 B1A区柱穴平面断面図	7
第6図 B1B区柱穴平面断面図	8
第7図 B1D区柱穴平面断面図	8
第8図 千畳敷建物配置想定図	10
第9図 B1C区柱穴平面断面図	11
第10図 B1C区地下室平面断面図	12
第11図 千畳敷全体平面図	13
第12図 B1地区堀切部分トレンド設定図	14
第13図 B1地区堀切部分断面図	15
第14図 寺屋敷トレンド設定図	19
第15図 寺屋敷試掘造構状況、柱穴平面断面図	20
第16図 千畳敷周辺縄張図	21
第17図 寺屋敷周辺縄張図	23

## 写真目次

写真1 B1A区虎口部分完掘	7
写真2 B1A区完掘	7
写真3 B1B区完掘	8
写真4 B1D区完掘	8
写真5 柱穴B1B P3・15	10
写真6 B1C区(C区)地下室	12
写真7 B1C区(C区)地下室東側斜面	12
写真8 BII Aトレンド完掘	15
写真9 BII Aトレンド断面	15
写真10 BII Bトレンド完掘	16
写真11 千畳敷出土遺物	17
写真12 寺屋敷試掘作業風景	18
写真13 寺屋敷出土遺物	19
写真14 現地説明会風景	26

# 第1章 左沢楯山城の概要

## 第1節 調査に至る経緯

左沢楯山城跡の存在は古くから知られており、昭和16年には沖津常太郎氏らにより本格的な調査がなされ、「千早城にも比すべき羽州きっての名城」などの評価をえていた。今日、この城跡の重要性が改めて認識されるようになったのは、『大江町史』の発刊、町の中世城館址調査員による精力的な調査研究、城館址研究の権威村田修三氏の独自調査に基づく全国への紹介などのためである。

こうした動向を踏まえ、左沢楯山城跡の調査研究が町の事業として計画的に始められることになった。

平成5年度は、東北大学東北アジア研究センター教授 入間田宣夫氏を委員長、山形大学教育学部助教授 伊藤清郎氏を副委員長に7名から成る「左沢楯山城跡調査検討委員会」が発足し、左沢楯山城が今日なお町のシンボルであり、町民の心の拠り所となっていること。山城は麓の居館・宿町・最上川河岸と一体となって戦国都市左沢を形づくる貴重な文化遺産であること。特に、最上川の河岸交通と中世城館との関係を具体的に復元できる可能性があること、を明らかにした。これを受け平成6年度は、調査対象を広げ本格的調査を開始するため、委員会を「左沢楯山城遺跡関連調査委員会」と改称し、委員を11名に強化して、「フォーラム—ふるさとの城を探る」の開催。左沢楯山城跡の範囲（A～D）の確定。築城が南北朝期・漆川の戦い・寒河江氏らとの抗争・最上氏の支配の4段階を画期に進められたこと、などを明らかにした。また今後の整備・保存のために青森県内の浪岡城・八戸根城を視察研修した。

平成7年度は前年度の調査を継続し、居館地域と波切不動・実相院などの宗教施設跡の構造を解明したこと。C地区の試掘を実施し、城内の建造物などの遺構発見の手がかりをつかんだこと。左沢楯山城に関する絵図や記録を収集し、周辺遺跡との関連を明らかにしたこと、などの成果を収めた。西山城・岩切城・千石城を視察研修。なお試掘・発掘では川崎利夫氏の指導、山形大学学生の協力を受けることとした。

平成8年度はC地区の西曲輪の発掘調査を実施した。短期間のトレンチ法の発掘にもかかわらず、曲輪は上下2段からなり、岩盤を削平し周囲に切岸をつくるなど見事な作事と普請が行われていたこと。曲輪には柵列や塀があり、上に3棟、下に1棟以上の小規模な建物があったこと、などを明らかにし、今後も主要曲輪を中心に発掘調査を継続する必要性を実証した。

平成9年度はB1地区の主郭・千畳敷曲輪を発掘調査した。千畳敷は独立した城郭の様相を見せ、左沢楯山城の起源と考えられている。発掘と縄張調査の結果、虎口・柵・建て替えられた3棟余の建物などが現われ、堅固な造りを今に伝える典型的な戦国期城郭遺構であることが明らかになった。なおこの年から文化庁の補助を受けた「おおえの歴史と文化創造事業」が始まり、「左沢楯山城の歴史とロマン探訪」が開催された。委員会は入間田委員長を顧問に、伊藤副委員長を委員長に選び、新体制となった。

この調査が平成10年度から5年間、文化庁の補助金を受けることになった。これを弾みに、年次的に主要な曲輪の縄張図を作成し、発掘調査を継続することになるが、本年度はこれまでの経過から千畳敷・千畳敷西の堀切り・最大の曲輪である寺屋敷がその対象となる。

## 第2節 遺跡の立地と環境

### 1 立 地

左沢楯山城は山形県西村山郡大江町大字左沢に位置しており、山城・居館・宿町の3つの部分から構成される。まず山城は、字限図の楯山・愛宕山・裏山・弁財天の区域に相当する。楯山の区域は、最上川を眼下に眺める景勝地楯山公園として知られ、西に山形県朝日少年自然の家がある。公園から尾根伝

いに東へ進むと、鉄砲場・堀切り道を越えて千疊敷に至る。ここから蛇沢をはさんだ北方は、付近で最も高い八幡平（標高230メートル）を中心とする山地で、東麓には寺屋敷の地名が残る。

自然の家の南西部は、愛宕山・秋葉山・裏山・弁財天（三吉山）の山地が続き、これらが全体として山城を形成している。この山城は、南は最上川、東と北は桧木沢（樺ノ沢）の深い渓谷、西は連続する沼（堤）の湿地帯に守られ、堅固な要害となっていたのである。また山城は、最初、南北朝時代に大江氏一族の左沢元時によって千疊敷を中心に築かれ（B<sub>1</sub>地区）、室町後期から戦国初期にかけて、愛宕山・公園部分（B<sub>2</sub>地区）から北の樺山（C地区）へと広がり、戦国末期に最上氏勢力が入ってくると裏山・弁財天部分（D地区）にまで拡大整備され、終には最上領内有数の山城が成立したものと思われる。

次に居館・家臣屋敷は、字限図の元屋敷・愛宕下の区域（A地区）で、南方の下部に前田の地名が広がる。更に宿町は、元屋敷の最上川沿の区域で、川端などとも呼ばれ、字限図に最上川に直交する短冊状に並ぶ町屋が見える。最上川舟運から発達した河岸の町並であろう。

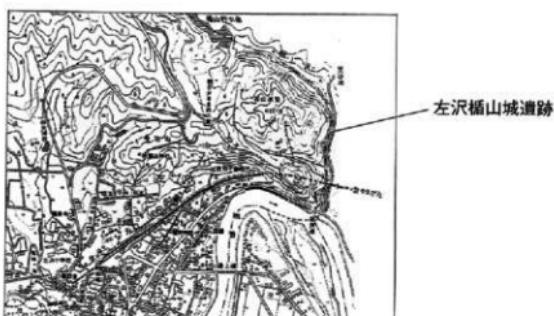
## 2 環 境

最上川は置賜地方から五百川峡谷を北流し大江町左沢に達するが、ここで急峻な樺山に行手を阻まれ、東へと大きく蛇行して平野部に流れ出る。また、左沢の南部で、朝日山地から東流してくる月布川が最上川に合流する。左沢は最上川の深く静かな流れ（柏濱という）を利用して、近世において舟運の河岸として発展した。特に元禄7年（1694）、米沢藩御用商人西村久左衛門による五百川峡谷の開削と整備は、最上川舟運を置賜地方にまで通じさせ、左沢河岸を飛躍的に発展させることになった。しかし、左沢河岸の発展は近世に始まったのではない。字限図から推定できる中世左沢の河岸と町並は、近世河岸とは別に、下流の元屋敷付近であり、最上川と深く結びついた姿を浮かび上がらせる。同時にこの辺りは最上川の絶好の梁場であり、河岸（舟運）と梁（漁業）で栄える左沢と、それを守り支配する左沢樺山城、という関係を想定することは自然であろう。

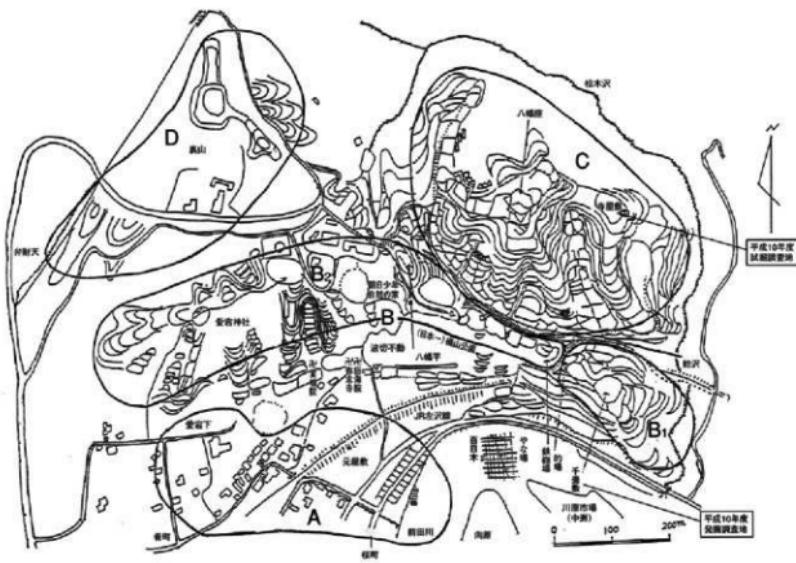
一方、陸上交通については、左沢は寒河江・柴橋など東への道、白岩・六十里越街道など北への道、月布川上流など西への道、宮宿・置賜など南への道が交差する位置にあり、交通の要衝の地であった。これは大江氏や最上氏にとって、領地の境目となる重要な地点であったことを意味し、左沢樺山城は陸上交通の重要な拠点を押るために築城されたことが分かる。

ところで、今日に見る左沢は中世の町並と近世の町並が、前田川を境に北と南に併存する興味深い景観を形づくっている。近世に入ると左沢樺山城は廃城となり、小塗川の地に新城が築かれると、それを中心に新しく町割りを行い近世の城下町ができたからである。

第1図 大江町主要部と遺跡位置図



第2図 調査概要図（鈴木勲氏作成図 一部補正）



### 第3節 周辺遺跡と歴史的環境

大江町とその周辺には、最上川・月布川の河岸段丘面に多くの遺跡が点在する。

古くは前期旧石器時代の明神山・富山遺跡。後期旧石器時代の庚申山・大山・金谷原・向原・望山・小見・下原・下原川端遺跡。縄文時代では、前期の大鉢遺跡。中期の大鉢・藤田A・十八才・大久保・小見・月布高・月布・南又・橋上遺跡。後期の望山・向田遺跡。晚期の道海大久保平・柳川青柳・柳川長畠遺跡がある。左沢・小塗川壇・堂が原遺跡も縄文時代の遺跡とされている。

奈良・平安時代の遺跡では、富山2・上山田・藤田B遺跡、藤田古窯群がある。藤田古窯群は傾斜地を利用した半地下式無段登窯数基からなり、出土した須恵器・赤焼き土器片から平安末から鎌倉時代の窯跡と考えられている。藤田若宮やな・橋上遺跡からも同じ遺物が出土している。この頃、平安時代の作とされる木造阿弥陀如来座像を安置する伏熊の護真寺は、平塩熊野神社と共に伏熊文化圏をつくっていた。諏訪神を祀る諏訪堂・諏訪原、腰王信仰の所部の起源も、この頃に求められている。

中世・鎌倉時代の左沢は、寒河江莊地頭大江氏の支配下に置かれた。親廣は莊内の守りを固めるため、最上川上流の富沢に大江匡朝を、対岸の伏熊に中山忠義を配置する。続いて大江氏一族が鎌倉より下向し、月布川流域の用大丈・葛沢・顔好・若松山・材木・十八才・要害・所部・小新に次々と居館を構え、

付近の開発を推し進めた。大江町内に鎌倉時代に起源を持つ城館遺跡が多いのはこのためである。

南北朝時代には、南朝大江氏は山形に入部した北朝斯波兼頼に対抗して、領内の主要拠点である寒河江・白岩・溝延・柴橋・左沢・荻袋・見附などに一族を配置して、城館を築かせる。左沢には元時が入り、最上川河岸と南西方面の押えとして左沢楯山城を築くのである。荻袋・黒森・岩木・小清の城館もこの頃に築かれたとされる。こうした備えにもかかわらず正平23年（1368）の漆川の戦いで、大江氏一族は斯波氏らの軍門に降ることになる。

室町・戦国時代には、置賜伊達氏や山形最上氏の再三の侵攻を前に、左沢氏は寒河江氏と反目し連合しながら戦乱を潜り抜け、左沢楯山城をはじめ領内城館の整備拡張に力を注いだ。富山・松川・大城・館山・沢口・柳川の城館はこの頃に築かれたものだろう。天正12年（1584）、大江氏一族が最上義光により貫見御館山に亡ぼされると、左沢は最上氏の支配下に置かれる。左沢楯山城には城番を置き、伊達氏や上杉氏へ備えさせた。事実、左沢楯山城は出羽合戦でも重要な役割を果たしている。

元和8年（1622）、最上氏が改易されると、左沢は酒井直次領となる。直次は左沢楯山城を廃し、新しく小漆川城を築き、新城を中心町づくりを進めた。直次後左沢は、庄内藩預り・庄内領を経て正保4年（1647）以来松山藩左沢領となる。近世の左沢は、最上川舟運の発展の中で、中継河岸としてまた奥山内の外港として、領内の青苧・漆の特産物や上方や酒田荷物を取り扱う商人を生み出し、市の立つ町場の性格を強めながら活況を呈したのである。

### 第3図 遺跡の位置と周辺遺跡



## 第2章 千畳敷とB1地区発掘調査

### 第1節 調査方法と調査経過

左沢楯山城B1地区、いわゆる「千畳敷」といわれている曲輪とその周辺の発掘調査は、1997年8月と1998年8月の二次にわたって実施された。第一次は8月4日より21日まで、実働7日。第二次は翌98年8月3日より26日までの実働11日であった。第一次の調査の目標は次の通りである。

- (1) 遺構の存否とその規模や性格の把握
- (2) 出土遺物などにより築造あるいは使用についての年代推定
- (3) 虎口の存在箇所の把握

本曲輪は、南から流下する最上川が大きくカーブをえがいて東へ流れる曲折点の直上部に位置し、最上川を指呼の間に望むことができる。B1地区千畳敷は、左沢楯山城の中では最重要な位置を占める。

山頂平坦部のいわゆる千畳敷は、平面形が南に頂点が位置する三角形を呈し、面積約540平方メートルである。遺構の存否を探るために南北に長さ16メートル、幅2メートルのAトレンチ、それと直交するBトレンチを長さ11メートル、幅4メートルに設定した。トレンチ法をとったのは、第一次調査が遺構の存否を確認することに主眼をおき、それに基づいて第二次調査も予定されていたので、もっとも効率的な方法を選択したのである。さらに虎口が存在したと推定される東南方向に切岸も含むCトレンチ長さ8メートル、幅2メートルを設定した。Bトレンチは当初幅2メートルであったが、柱穴など遺構が発見されたので、その規模をさぐるために拡幅したものである。Cトレンチの切岸に望む箇所から柵列風の小穴が発見されたので、さらに切岸の崖面にそってC'区を設けた。第一次の発掘面積は120平方メートルである。

A Bトレンチの交点を中心に、円柱又は角柱で構成される3間×2間ぐらいの東西棟、その西側に南北棟、さらに東西棟と平行にもう1棟の掘立柱建物があることがわかった。それらは3回程度の建て替えが行われたらしく、同じ箇所に柱穴が集中したり重複するものもあった。東南隅に予想された虎口は発見されず、角材列が検出され周辺に柵をめぐらしていたと推定される。したがってこの曲輪に入る虎口は反対方向の西南に存するものと推定される。廢城の際に柱はすべて抜きとられたものと思われる。出土遺物は全くなかった。

第一次調査の成果の上にたって、第二次調査の目標を次のように設定して作業を開始した。

- (1) 主要部分の全面発掘によって建物の全容を把握する
- (2) 南西に存在すると推定される虎口を確認する
- (3) 出土遺物などから千畳敷が機能していた年代を把握する。

Bトレンチをさらに西側(BIA区)、北側(BIB区)、南側(BIC及びBID区)を設定し、Bトレンチを南北西に拡張することにし、建物跡の全容把握につとめた。またBIA区より切岸突端部で虎口と思われる門状の柱穴を検出した。さらに調査の後半段階に入って、BIC区の東側より、地表から垂直に掘り込まれた遺構が発見され、地下室であることが判明した。深さ1.6メートルでようやく床面に達し、長さ4.6メートル、幅2.5メートルで、さらに地下室への入口部分が2メートル余りつづき、切岸崖面に開口していることが確められた。この地下室は全掘して構造を明らかにした。出土遺物は陶器片など3点の小破片であった。発掘面積110平方メートルで、第一・二次で230平方メートルを数え、千畳敷の平坦面の50パーセント弱である。なおこれと平行して、この曲輪に入る西側の下の掘り切りに2箇所トレンチを設定して、堀底道の実態を把握した。これらはBIA区及びBトレンチとした。2箇年にわたる以上の発掘調査によって、千畳敷の主郭や掘切りの状況が明らかになり、当初の調査目標をほぼ

達成することができた。

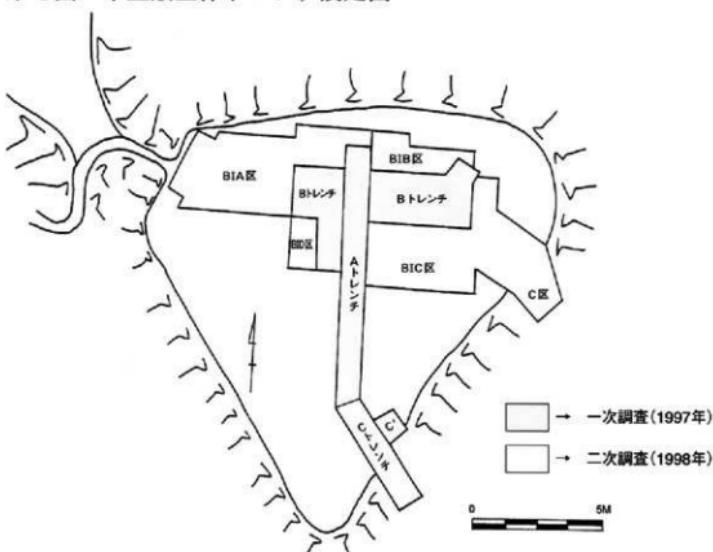
## 第2節 千畳敷の発掘

B1地区はいわゆる「千畳敷」を主郭とする曲輪群を総称する。主郭である千畳敷は、櫛山公園あたり（B2地区）より東に傾斜しながら延びる尾根を掘り切りによって削して、直下に最上川屈曲部を望む場所を占める。主郭千畳敷は、頂点を北側へ向けた平面形を呈する平坦地を形成する。標高194メートル、山麓平地部よりの比高は85メートルである。左沢櫛山城の曲輪群ではもっとも南西部に位置し、最上川にももっとも近い。「二の丸」ともいわれているが、直下を寒河江市から大江町に至る旧国道287号線が通っている。これは最上川と山地にはさまれたきわめて狭い場所である。（第17図）

千畳敷の面積は540平方メートル程度であるが、四周はすべて5~8メートルの急崖となっており、西側は掘り切りによって遮断され、千畳敷に至るまで2段のわりと広い曲輪が連なる。堀り切りによる堀底道を西から南にまわり、二つの曲輪を通って、幅1メートル内外の土橋状の狭い路をつたって西南隅から千畳敷に入ったようである。南側は傾斜の急な崖をなして最上川にのぞむが、特に施設は見当らない。東から北側にかけては、帯曲輪が10段から5段にわたって下から上へ段状に連続する。主郭である千畳敷を全周する腰曲輪はなく、途中でと切れて北から西側へめぐっている。

以下97年度と98年度の2次にわたる調査の概要を、千畳敷入口附近、柱穴の集中するABトレンチの状況から想定される建物構成、BIC区の地下室の順で述べることにする。（第4図）

第4図 千畳敷全体トレンチ設定図



## 1. 虎口付近の調査

第一次の調査によって東側に虎口と考えられる千畳敷主郭への入口が存在しないことが明らかになつたので、その反対側の西側、西南隅の現在ここに至る登り口より入った場所に門跡などの施設痕跡が存在するとの想定で第二次の調査において重点的に発掘を実施した。

切岸にそって北側から西側へ発掘区を拡大しBIA区を設定し、入口附近50平方メートルを発掘した。西側の切岸附近は、電柱の埋設のために広い範囲にわたって深掘りされており、状況を把握できなかつたが、現在の下から登ってくる狭い山道を千畳敷に上がつたところで、1列に並ぶ柱穴群が3箇所で検出された。もっとも左よりP11、右側はP13、P14で、ほぼ一直線に南々東より北北西へ並んでいる。いずれも径20センチ、深さ30センチほどであるが、右側のP13のみ一辺15センチの角柱状であった。

P11は2つのビットが重複しており、P13とP14は隣接しているので、2回にわたる建て替えがあつたものと思われる。門の入口部分はP11とP12の間にあつたと思われ、1メートル50センチの柱間である。P12とP13及び14までは1メートルほどであったと思われる。P12を門柱とするならば、P13・14は控え柱のようである。またP11は向て左側の門柱と思われるが、これより1メートル左側にある筈の控え柱は搅乱されているため確認できなかつた。

これらの資料から考えられることは、千畳敷に入る門は、四脚門などの構造ではなく、二本柱による棟門か薬医門のようなものであったと推定される。とくに立派で堅固な門ではなかつたと思われる。そして控え柱にとりつく欄がめぐらされていた。西側の曲輪から狭い土橋を登りつめて、この門から千畳敷内へと入つたのであろう。(第6図)

第5図 BIA区柱穴平面断面図

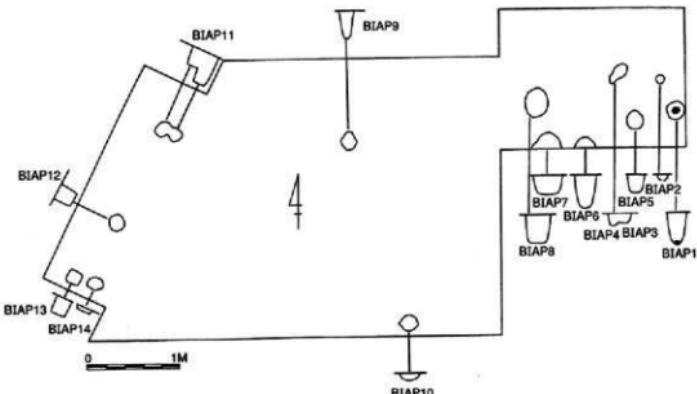


写真1 BIA区虎口部分完掘



写真2 BIA区完掘



第6図 B I B区柱穴平面断面図

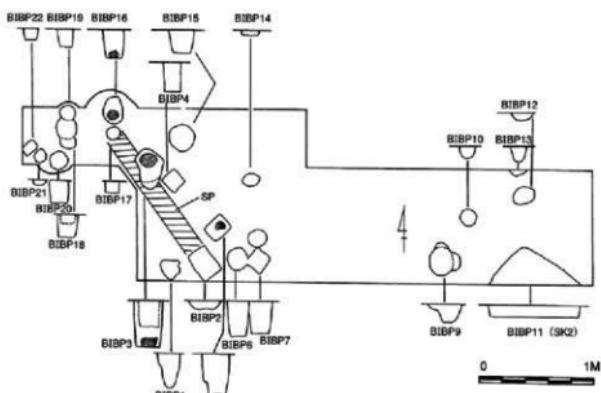


写真3 B I B区完掘



第7図 B I D区柱穴平面断面図

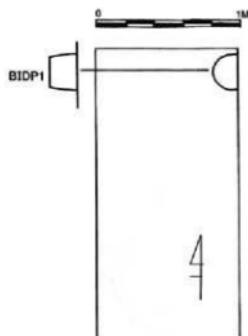


写真4 B I D区完掘



## 2. 捜立柱柱穴群と建物の構成

発掘された千疊敷北半の約200平方メートルの面積の中から、128基の柱穴が検出された。このなかで角柱を埋め込んだと思われる方形のピットが21、平面円形をなすものが大半で109基を数える。この中で柱穴とは考えがたい杭を打ちこんだと思われる小ピットが14、掘りこみが浅く柱穴とは認めがたいピットが11あるから、柱穴として機能したものは100基ぐらいであろう。他に土坑3基、溝2本、地下室1棟が発見されたすべての遺構である。

それらは図面でわかるようにAトレンチとBトレンチの交点やBトレンチを拡張したBIA～D区に多くみられた。それらを仔細に観察すると、柱穴の集中地点がいくつもあり、桁を東西におく中心部のやや大型の建物を中心としてその前面南側にそれと平行するような東西棟、西側に南北に桁をおく南北棟があったものと思われる。つまり主屋の前面にこれと平行する建物、その左側（西側）に南北棟の3棟の建物が配置されていたことが確められる。これをSB1、SB2、SB3としよう。これは柱穴配列から大よその建物配置をよみとった結果の推測である。しかし柱穴の数が多く方角状をなすピットも混じるので、単純な様相ではない。柱穴が重複しているものもあり、SB1の建物をみると、3乃至4回ほどの建て替えがあったものと思われる。SB2は2回、SB3は3回程度の建て替えがあったのであろう。多分SB1の建物がはじめに成立し、それとほぼ同じにSB3が建てられ、SB2は後に建てられた可能性がある。建物の先後関係については、伴出遺物がほとんどないので把握するのが困難である。

現地表より15～20センチの深さで岩盤に達し、その面で柱穴や他の遺構が検出される。しかしすべて岩盤がひろがっている状態ではなく、岩盤がない箇所もあり、そのようなところには礎板の代りに柱痕の基礎に平石がすえられる。例えばBIB区16の柱穴をみると、これは検出面での直径56センチ、深さ60センチ、底面径30センチで、底面に丸くて偏平な基石を大きくしたような形の礎石の根固め石をすえていた。これには直径20センチほどの円い柱が立っていたと思われる。このきわめて明瞭な柱穴に並ぶものは、17・18・19・20・21または39であるが、16と17では柱間1メートルであるから建物の柱間としては余りにも短い。16と18は1.8メートルではほぼ適合するといえるだろう。この建物の柱間は、1.8～1.9メートルを測り、おそらく6尺間隔の柱間であったと考えられる。岩盤を掘りぬいた柱穴は多いが、これは基礎が安定しているので根固めの石はない。柱穴は総じて径30センチから50センチぐらいのものが多く、深さは35センチより60センチほどで、掘方はきわめて小さい。径10数センチより25センチ程度の柱を埋めこんだのであろう。掘り方が小さいのは中世後半からの掘立柱建物の特徴でもあるが、岩盤に穴を穿つということもあって殊更に小さかったのだろう。柱穴は地表より垂直に穿たれたものが多く、底面で狭くなるものは少なく断面は長方形かやや上方に開く逆台形のものが多い。

中央に位置する建物1（SB1）は、3回以上の建替えがあったらしく、柱穴が重複するものもある。当初の建物は桁行4間、梁行3間、9メートル×3メートルほどの東西棟で、建て替え後の最終段階では4間と2間、7メートル×2.3メートルほどと角柱を用い縮小されている。主屋の主柱穴に対応してそれらと向き合うP28・30・32・33などの柱列群が並ぶ。従って当初は主屋の建物1には北側に縁か廊があったとも考えられる。他のすべての建物の柱穴に共通するが、柱穴の内部には木質の柱根が残存している、それが腐植した黒色有機土が充填しているのが普通であるが、それが認められず、やや色の変った周辺の土が入りこんでいるところをみると、柱はこの曲輪の廃絶にあたってすべて抜きとられたものであることを示している。

この主屋と思われる建物1（SB1）の西側に約2メートルの間隔をおいて、西側切岸にそって建物2（SB2）がある。これは南北棟で4間×2間、6メートル×2.5メートルを測る。SB1に対して健

形に配置される。これは2回の建て替えが想定され、当初の梁行が短くなり柱間1間のものに変り、細長いつくりとなっている。この建物の北側床面下に幅12センチ、深さ6~7センチの小さな浅い溝が東西に7メートルにわたって走っている。この溝跡には灰がつまっており、建物の廃絶後、物品を焼却するなどのことが行われた跡であろう。なおこのあたりから磁器小片が採取されている。SB2は切妻造りなどの簡素な建物であったろう。

SB1の前面にこれと平行して建つSB3の建物は、3間×2間の東西棟で、7メートル×2.4メートルの規模である。2回の建て替えが行われている。SB1との間隔は2.5メートルほどで、SB3との間に5~6センチの段差がありSB3が僅かに高い位置にある。

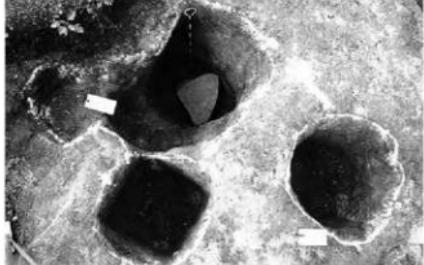
土坑はSB2の南側に浅い小規模なものがあり、70センチ×30センチの長方形で底面は凹凸があり、深さは20~30センチである。SB1の後方北側にも形のよい土坑が検出された。112センチ×70センチの長方形で底面も平坦である。周囲に柱穴が配される。水を溜めるような施設かと思われる。

(第7.9.10図)

第8図 千畳敷建物配置想定図



写真5 柱穴 B1 B P3・15



### 3. B I C 区の地下室

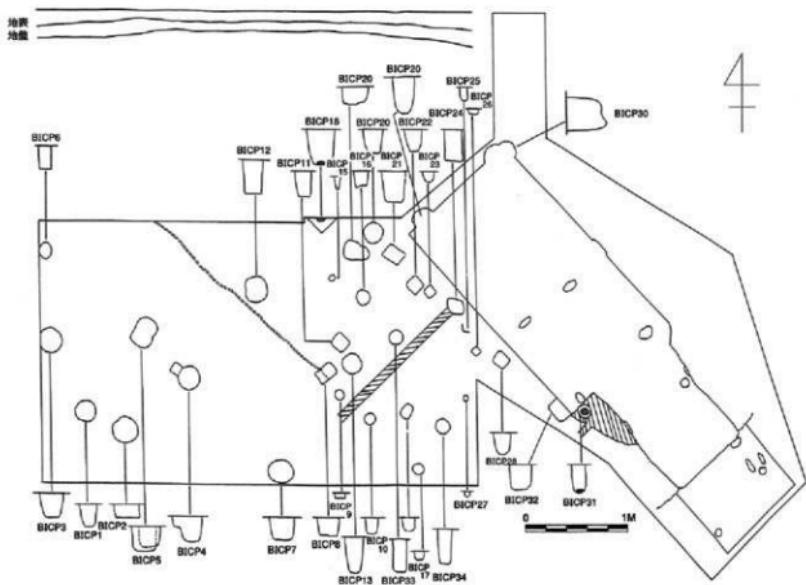
今年度の第二次調査において、Bトレーナー及びB I C 区を東に拡張したC区より地下室が検出された。それはSB1の東側にあり、最終段階の建物より、やや南に折れて2メートルの間隔である。主軸は北西-南東である。長さ4.6メートル、幅2.6メートル、深さ1.6メートルの主室部に、長さ2.4メートル、幅1.1メートルの通路が東側切岸崖面にむかって開口する。したがって平面形は、あたかも横穴式古墳の玄室と羨道に類似する。

主室部は地表より岩盤を垂直に掘り込んで四壁がつくられ、1.6メートル下の床面も平坦で、随所にうすく黒色有機土が堆積している。分析の結果、木質様のものが腐ったものとの所見が得られたから、床面には板が敷かれていたのである。壁面にそって円柱痕、周辺に角柱列、内部に4個の小ピットが検出された。壁面にそった円柱痕は、その痕跡が認められるのみであるから、もともと小さかった地下室の四周の壁を1尺程度削って拡張したもので、もともと地下室の外周にあった柱痕であろう。内部にも4箇所に円柱穴があり、外周左側にも角柱痕があることや外周に板材をはめ込んだような細い溝があることから地表よりやや延びる板材の壁面があり、屋根が架されていたのであると推測される。

主室の片袖にやや狭い通路が切岸部にむかってのびる。入口には何らの施設もないが、下の曲輪平坦面との間には2メートル余りの段差が認められ、不明瞭ながら足を掛けける程度の階段状につくられていた。千疊敷の曲輪の廃絶時には、この地下室も埋め立てられたらしく、層序が乱れており床面に近い場所には岩塊が投げこまれ、上部は粘土や土砂であったが、わりと空隙が多く層序はバラバラであるところから急いで埋められた形跡がある。

この地下室は、比較的に大形であり、籠城時の食料や武器などの貯蔵・保管のために構築されたものと考えられるが、戦闘時には迂回作戦などにも利用することができる機能をもつ。(第10図)

第9図 B I C 区柱穴平面断面図



第10図 B I C区地下室平面断面図

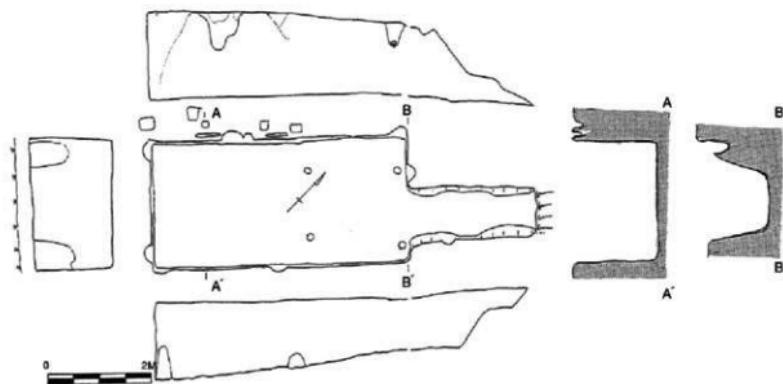


写真6 B I C区(C区)地下室



写真7 B I C区(C区)地下室東側斜面



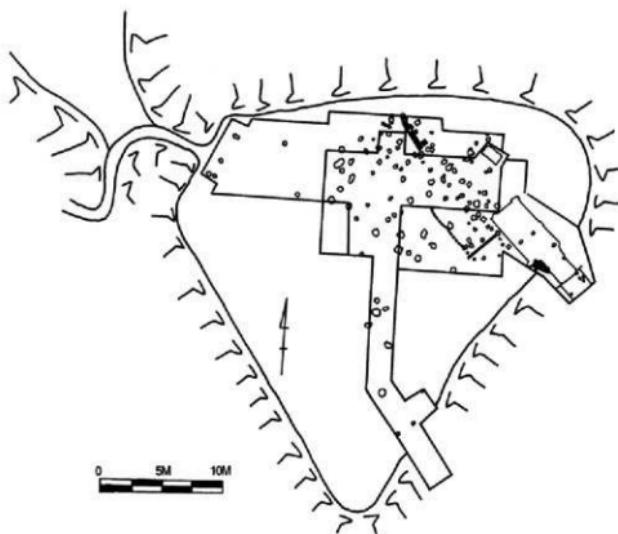
#### 4. 千畳敷の全体像

千畳敷（B1地区）とそれをめぐる曲輪群は、左沢楯山城の中でもっとも重要な位置を占める。最上川にのぞむ南側は急崖をなし、三方は2段から10段以上の曲輪によって囲まれ、完ぺきともいえる城郭としての堅固な構造を示している。

二次にわたる調査によって、主郭平坦部のはば全容が明らかになった。土橋状の狭い通路から千畳敷に上ると、まず門が構えられ、平面三角形状をなす平坦部は切岸にそって柵が設けられている。正面中心部に桁行4間、梁行2間の東西棟がある。これは他の例から推して寄棟造の比較的立派な建物であったと思われる。その左手に4間と2間の南北棟切妻造と推定される細長い建物があり、さらにSB1の主屋の前面に、3間2間の建物が平行して配置される。これら建物群の南側前面は広場となり建物はない。

これらは2回乃至3回あるいは主屋においては4回ほどの建て替えが行われている。さらに特筆すべきは、主屋の棟つづきに巨大な地下室が設けられ、これは東側切岸崖面を入口とするものであった。籠城にあたっての物資貯蔵と通路の機能も併せもつものである。最終段階でこれらの建物群は角柱などを用い若干縮小されるが、掘立柱の耐用年数20~25年とすれば、少くとも60年から80年ぐらいこれらの建物群は存在したことになろう。廃絶にあたっては、柱をすべてぬきとり地下室も埋め立て、その痕跡を完全に消していることは、出土遺物が稀少であることからも裏づけられる。廃城の時期を元和の頃とすれば、16世紀前半より17世紀前半までこの曲輪の建物群が存在していたことになろう。（第9.12図）

第11図 千畳敷全体平面図



### 第3節 B1地区堀切部分の発掘

千畳敷の西側は2段の曲輪が台状になり、その下に西側につづく曲輪を遮断するように現況で幅9メートルほどの堀切りが約30メートルにわたってつづき、これはさらにいまの農道から一度屈曲して堀切りにはいるようになっている。明らかに谷底部の現農道から折れて、堀底道を通り、そこをぬけて南側にまわり、千畳敷下の西側曲輪に至る通路であったと思われる。

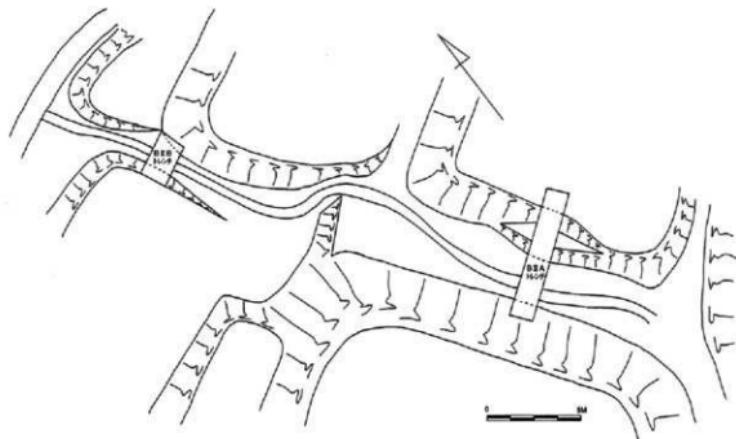
堀切りの中心部分に幅2メートルのAトレーニチ、農道からの入口附近に幅2メートルのBトレーニチを設定して基盤層まで掘り下げて、旧状や工法を把握することにした。

Aトレーニチは、表土層の下に黒褐色土層があり、この層が当時の表土であったと思われる。西側につづく曲輪の傾斜面に、この土層によって築かれた一段の平坦面があり、上から土を移動して段を築いたものと思われるが、現状では斜面に見える。堀底には30センチほど表土が堆積していた。黒褐色土層の下は10センチ内外の褐色で山の礫を混えた褐色層がつづき、基盤層をなす凝灰岩の岩盤に達する。左手の東側の斜面には、岩盤を幅30センチほど削平した大走り状の狭い平坦面が堀底に平行して認められる。

以上の所見から、両側にせまる曲輪を遮断するために上から掘った堀切りというよりは、もともとここが断層などによって形成されたくぼ地であったことは、東側岩盤の亀裂が斜めにおちこむ状況からも観察される。そのような地形を活用して形を整え箱堀としたのであろう。堀切りとしての機能よりもむしろ堀底を利用した通路としての役割を果したのであろう。深さは西側曲輪の下段平坦面より3メートルほどである。みごとな箱掘りを呈する。

農道から右方向に折れて前記のAトレーニチを設定した堀切りに入る入口附近に設定したBトレーニチは、現況で幅4メートル、東西両側に現在果樹園となっている平坦地の低い曲輪にはさまれ、深さ1メートル前後の通路状をなす。層序はAトレーニチと同じである。左側（東側）は幅30センチ、深さ20センチほどの側溝状をなしている。もともとは幅3メートルほどで堀切りのところに真直ぐ上っていくが、途中に高さ80センチほどの段差がある小さな曲輪がさえぎり、やや右折して堀切りに入るようになっており、ここで小構形状をなしている。やはり進攻してくる敵に対する備えとして設けられたものであろう。

第12図 B1地区堀切部分トレーニチ設定図



第13図 B1地区堀切部分断面図

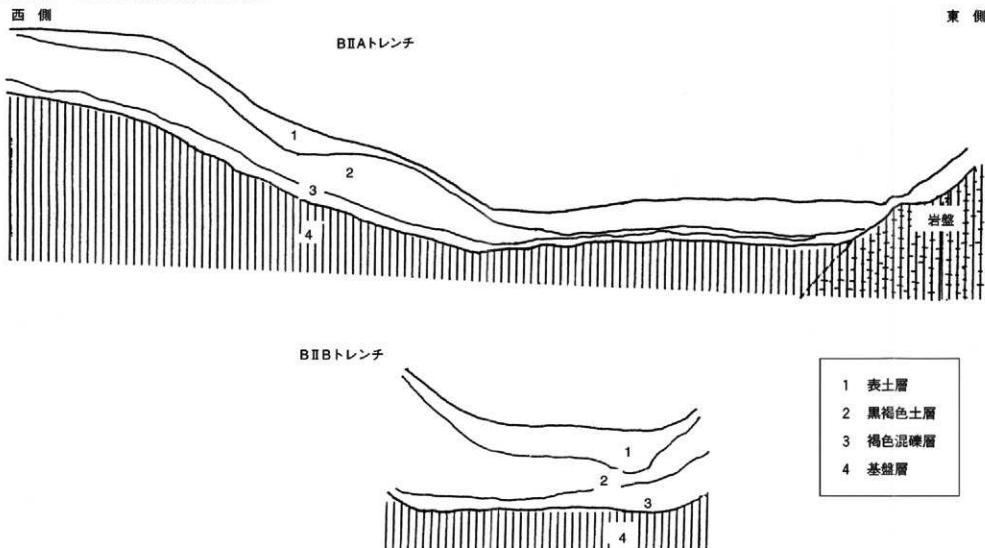


写真9 B II Aトレンチ断面



写真8 B II Aトレンチ完掘



写真10 B II Bトレンチ完掘



#### 第4節 出土遺物

山城からの出土遺物が少ないことは通常である。これは日常生活の場ではないからであろう。千畳敷も同様で、ここで籠城したり戦闘が行われたことはない。平常は時々見廻る程度であったし、廃城時にはほとんど丁寧に片付けられたのである。したがって出土遺物は陶磁器の小破片3点のみである。

1は須恵器系陶器片。黒灰色を呈し、表面光沢ある。生地に砂粒が混じる。内面にはナデの痕跡が認められる。地下室のB I C区より出土した。壺体部の破片である。

2は褐釉陶片でやはり底部の一部である。底面にはろくろ痕があり、底面に近い部分は無釉であるが、生地は素焼きの褐色を呈し、粘土粒の貼付けが認められる。灯明皿の一部のようである。壺器で美濃系とみられる。これも1の近くから出土した。

3は磁器の染付の小片。底部の破片で高台付の皿の一部と思われる。白色の表面に呉須による藍色の植物文様が描かれる。中国明末の時期と推定される。B I B区の遺構検出面から出土した。

以上の3点の出土遺物は、いずれも地元の陶磁器ではなく、遠い地域から持ち込まれたものである。年代的には16世紀代として矛盾はない。これはさきに推定した遺構の年代とも一致し、明らかにこの曲輪が機能していた頃の遺物であろう。

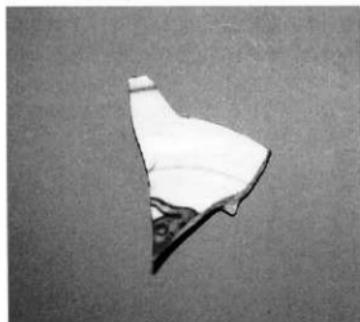
写真11 千畳敷出土遺物



1. 須恵器系陶器片



2. 褐釉陶片



3. 磁器染付小片

## 第3章 寺屋敷試掘調査

### 第1節 遺跡の立地と環境

主郭があったといわれている、八幡座（標高215メートル）などの峰々が、東方に250メートルほどのびたあたりで、急に傾斜し、断崖となって桧木沢に面している。その中腹に平坦地（標高167メートル、比高167メートル、面積186平方メートル）が開けている。この地は以前巨海院があったとされ、寺屋敷と呼ばれている。現在は、果樹園になっている。

『巨海院由緒』によれば、寒河江市落衣にあった巨海院が、ここの地に移築され、さらに波切不動の西方に移されたといわれている。

寺屋敷は、東西は蛇沢の渓谷、東北は深い渓谷の桧木沢、背後は八幡座などの峰々の断崖によって囲まれた、天然の要害の地である。

### 第2節 調査の概要

今回の試掘調査は、遺構の存否と、その規模の把握のために、遺跡の南北に、巾1.5メートル、長さ35メートルのAトレンチ、それに直角に交差するように、巾1.5メートル、長さ3メートルのBトレンチ、巾1.5メートル、長さ15.5メートルのCトレンチを設定し、試掘調査に入った。

各々のトレンチで、地表より50センチメートルぐらいで岩盤（第3紀凝灰岩）に致し、A・B・Cトレンチから、大小のピット総数41が検出された。

特にAトレンチと、Cトレンチが交差する辺りで、2.3メートルぐらいの同間隔で、Aトレンチから岩盤に掘り込んだ5本の柱穴列、Cトレンチから、2本の柱穴列が検出された。

柱穴を詳細に検討すると、Aトレンチ検出のAP15は、検出面で、径40センチメートル、深さ25センチメートルの角柱穴、AP16は、径40センチメートル、深さ30センチメートルの角柱穴、AP17は、径20センチメートル、深さ18センチメートルの角柱穴、AP20は、径25センチメートル、深さ26センチメートルの角柱穴で、Cトレンチ検出のCP2は、径40センチメートル、深さ23センチメートルの円柱穴、CP6は、径25センチメートル、深さ26センチメートルの円柱穴である。

今回の調査では、遺跡面積1860平方メートルのうち、試掘面積はわずか97平方メートルで、全体面積の10分の1にも達せず、遺構の規模、性格を確認することが出来なかったが、AトレンチとCトレンチが交差する辺りでの、同間隔の7本の柱穴列、柱穴の径・深さなどから、堅固な同一建物遺構の1部であることが確認できた。

今後の発掘調査は、AとCトレンチが交差する辺りから、トレンチを拡張していくことで、本遺跡の規模や性格を明かにしていくことが出来ると考えられる。

写真12 寺屋敷試掘作業風景



第14図 寺屋敷トレンチ設定図

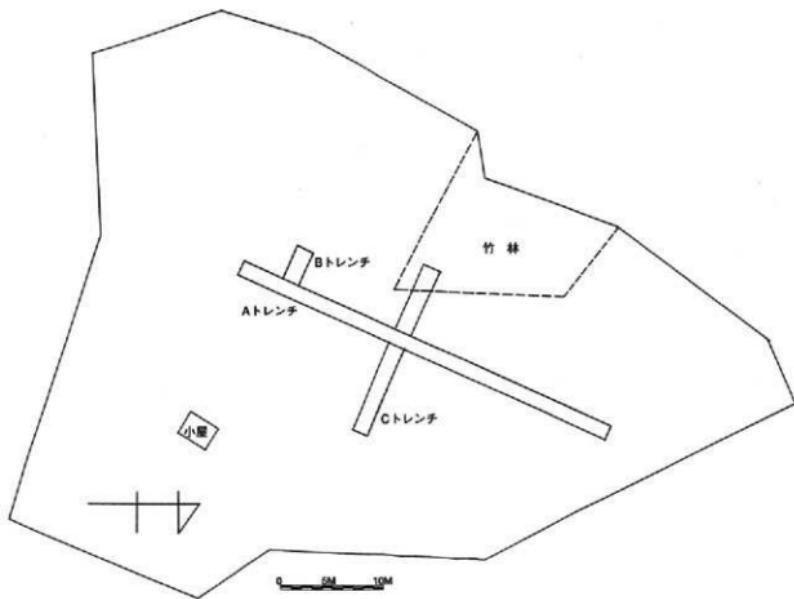
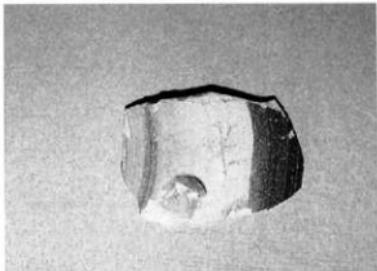
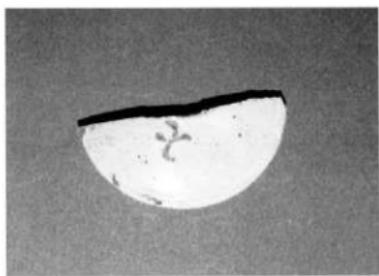
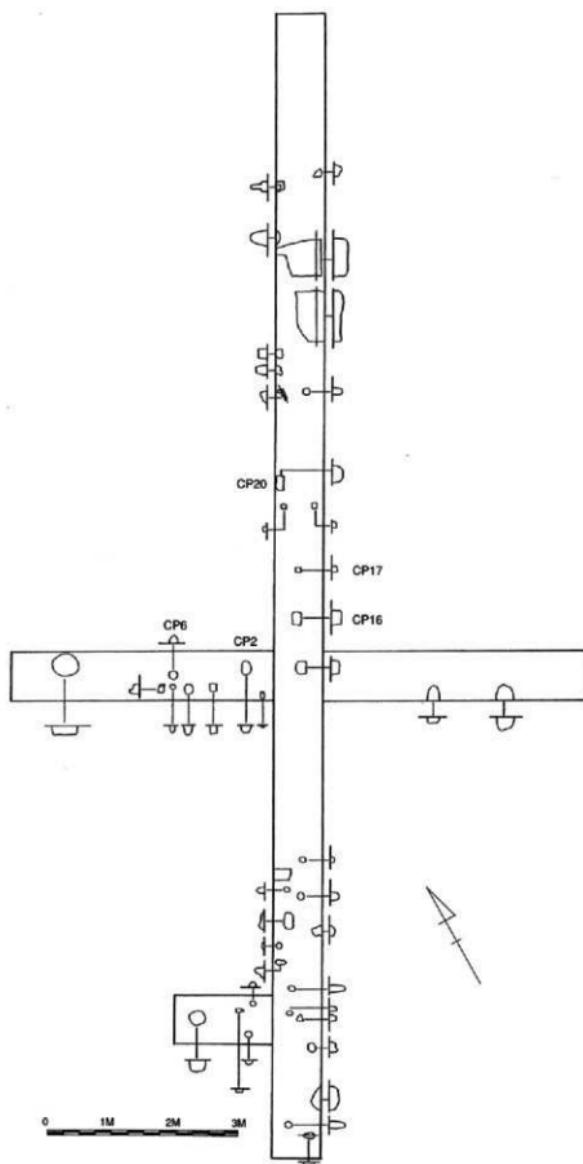


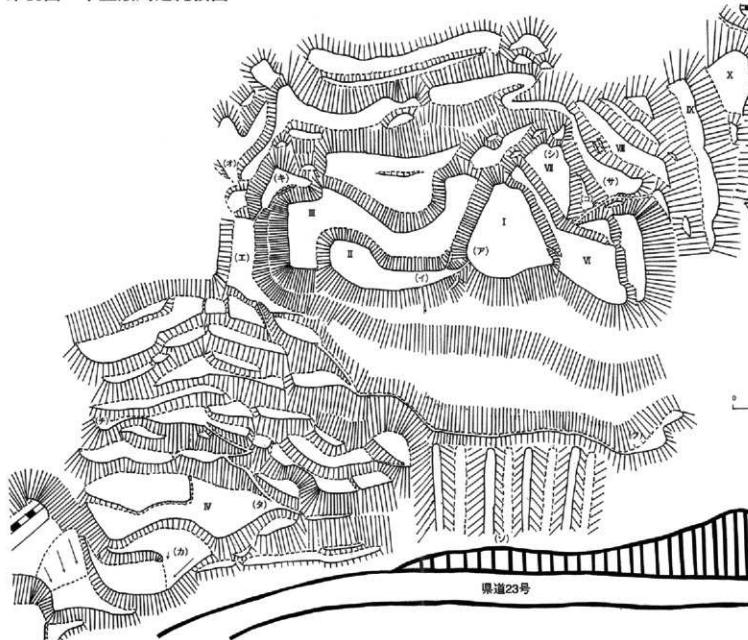
写真13 寺屋敷出土遺物



第15図 寺屋敷試掘遺構状況、柱穴平面断面図



第16図 千畳敷周辺縄張図



(注) I は千畳敷  
(エ) はB1地区発掘堀切地点

## 第4章 縄張図調査

### 1. 千畳敷周辺の縄張図

平成9年度に引き続きB1地区西半分の縄張調査を実施し、この地区的構造の全貌がほぼ明らかとなつた。昨年度調査・報告された「千畳敷」と呼ばれる曲輪Iを中心とした東側から北側に備えられた曲輪群が、蛇沢・檜沢の道を意識した「橋の内側の額」であるのに対し、今年度調査した箱堀(エ)から麓の居館A地区に至る南側斜面に築かれた曲輪群は、最上川を利用した水上交通及び町場をにらんだ「表の額」にあたる地域で、非常に巧妙な造営が確認された。

この地区的中心となるのは十分な小屋掛け可能な曲輪IVであり、麓に近く、最上川をすぐ近くから見下せることから、舟運の監視や城内への物資の補給を行っていたと思われる。その下段(カ)には坂虎口が認められ、曲輪IVへの往来が想定される。

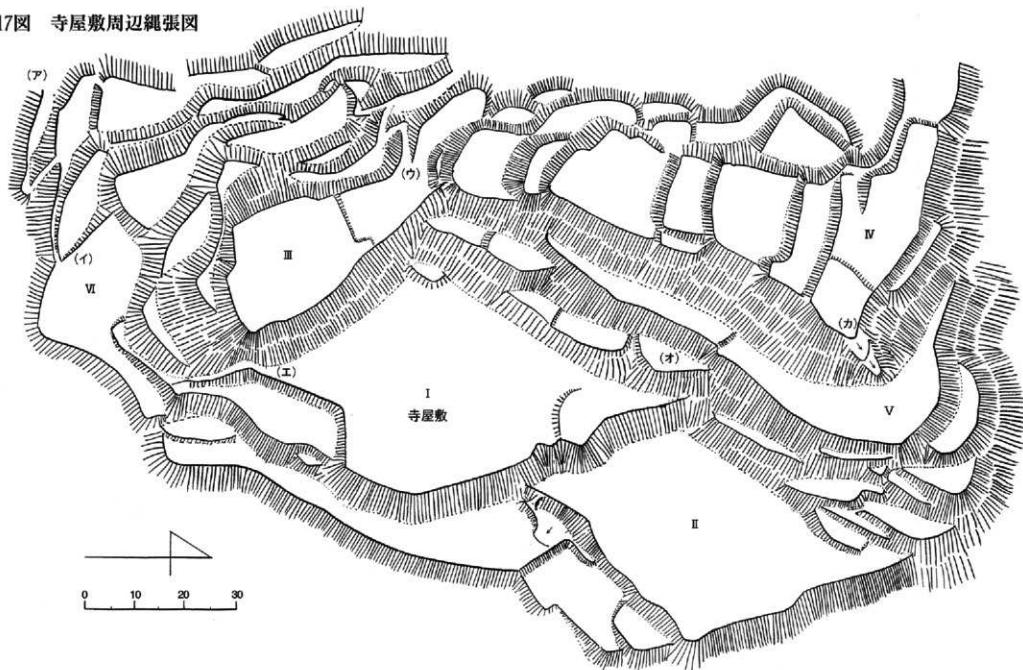
曲輪IVから箱堀(エ)に至る道(タ)はこの曲輪群のほぼ中央を通ると推測され、この道を通る敵は

繋えず上方と左右から攻撃を受けることになる。特に(チ)部の曲輪は両側の土を盛って、より前方に張り出させ狙い易いように配慮してある。

また、この曲輪群の東西には堅土塁と堅堀が築かれ〔東側には4本(ソ)、西側にも今年度の調査対象地域外であるが存在が確認されている(セ)〕、曲輪群からの斜面の横移動を封じている。そのためこの面を登る者は必ず堀底(エ)に導かることになり、頭上の的場・鉄砲場(台?)からの集中攻撃を浴びることになる。反対側の蛇沢から「千畳敷」に登る場合も、この堀底から曲輪(キ)・曲輪IIIを経ることから、B1地区における箱堀(エ)がいかに極めて重要な防衛施設であるかがうかがえる。

まだ南東部が未調査ではあるが、ほぼB1地区の特色を見極めることができた。また発掘調査から、「千畳敷」一帯が築城時から戦国期を経て廢城に至る時期まで山城として機能していたことも確認された。(ア)には、発掘により門跡の存在を確認した。また(エ)は、B1地区堀切發掘の場所である。

第17図 寺屋敷周辺縄張図



## 2. 寺屋敷周辺の縄張図

寺屋敷と称される曲輪（I）は、左沢橋山城の北東端の方に存在している。曲輪（I）は、実に広く、寺院遺構存在の推定が縄張上からも可能である。この曲輪に入るには、蛇沢を通る道から（ア）に入り、上の曲輪（VI）に到るルートが考えられる。（イ）の地点にいたるまでに、道は2回屈曲し、曲輪（VI）からの攻撃にさらされる。曲輪（VI）より曲輪（I）に延びるルート（エ）を通る敵兵は、その上にある曲輪（III）からの攻撃にさらされる。曲輪（III）は、ルート（エ）に睨みをきかす上で重要な曲輪である。

寺屋敷の曲輪（I）の東側にも曲輪が広がる。今回は、2段ほどの曲輪の縄張をとったが、さらにこの図の東側にも曲輪が存在しており、その下は急峻な崖となって桧木沢川に落ちていた。一方、曲輪（I）の北、一段下がった地点に曲輪（II）が広がっている。この曲輪も広大であり、数棟の小屋掛けに十分の広さである。興味深いのは、曲輪（II）の北端より、上の曲輪（V）に到るルートを守るために曲輪群が5段にわたって設けられていることである。曲輪（V）の北側は、急峻な崖となっており、

南の方は、曲輪（I）・（II）の上に連なる帯曲輪となっている。曲輪（I）の北西端に虎口状の（オ）地点があり、ここより上に登ろうとしてもルートは途中で切れてしまう。敵を欺くための装置である。

曲輪（V）へは曲輪（IV）の北東端から（カ）が崖土壘状に下に落ちている。（カ）の両脇は削られている。曲輪（IV）は、自然地形と考えたときもあったが、東西に広がる曲輪であると思われる。曲輪（III）より、曲輪（IV）へは6段に及ぶ実に堅固な曲輪群が連続として統いており、しかも、この曲輪群の西側にも小規模な曲輪群が広がっている。（ウ）は、曲輪（III）への虎口であり、曲輪（IV）から西の尾根筋上に八幡座がある。

寺屋敷の空間が、この曲輪（III）から曲輪（IV）に到る尾根筋の曲輪群の真下にあることの意味は、秋田県能代市檜山城などを参考にして、今後、考察すべきである。今回の縄張調査で、寺屋敷周辺の曲輪群が実に堅固であり、しかも保存状態もよく、その様相は、左沢橋山城全体の中でも圧巻というべきものであることが分かった。

## 第5章 成果と課題

### 1. 今年度調査の成果

#### 1) 発掘調査の成果

まず発掘調査の成果に関してみてみる。千畳敷部分に関しては、昨年度と今年度の2ヶ年にわたる調査により山頂曲輪に建物跡3棟・地下室跡・門跡・柵列跡・切岸・多数の柱跡などが確認された。この曲輪は、居館跡と考えているA地区のすぐ後ろに位置し、根小屋式山城として南北朝期には築城され、その後何度か建て直しされたと推定されている。さらにこの曲輪からは最上川と河岸、それに河原市場と称される中洲もよく見え、舟運と河濱を押さえる左沢楯山城の中核にあたる曲輪であると考えられている。それだけに発掘には期待がもたれたわけであるが、期待を裏ぎらず、遺物こそ少なかったものの、柱穴跡も多数の丸柱跡・角柱跡が出土し、何期かにわたる増改築がなされたことが確認された。また曲輪の角を削平した切岸と曲輪の周辺にはぐるりと柵列が回されていたことも明らかになった。虎口には門が設けられ、曲輪には地下室も設けられていることから、この曲輪が重視されていたことが理解されよう。

同時にB1曲輪西側堀切部分にAトレンチ・Bトレンチを入れたのであるが、予想通りここが堀底道であることが判明した。ここは蛇沢方面から居館部分A地区へ抜ける通路であり、敵が入り込んだ場合に堀の両側の曲輪から攻撃できるように造成してある地点である。箱堀の技法でしっかりと築いていることが明らかになった。

続いて寺屋敷部分の試掘を実施したわけであるが、A～Dトレンチから柱穴が多数出てきた。若干の遺物も出土した。建物跡が確認できたわけであるが、曲輪の名称通りの寺院の存在などについては今後の発掘課題といえよう。

#### 2) 繩張図調査の成果

次に縄張図調査の成果に関してみてみる。縄張図の作成は、B1地区とC地区について実施した。B1地区つまり千畳敷と呼ばれる曲輪を頂点とする地区については、昨年度と今年度の2ヶ年にわたりて実施した。特に今年は南斜面に寄生していた矢竹を切り払ったので調査は順調に進展した。前述の堀底道からA地区居館部分へ至る道もある程度は推定できるようになった。国道287号線と接する南西斜面には4本の豊土塁が見つかり、河岸のあった地点および最上川の船上からよく見えるいわば左沢楯山城の「表の顔」の部分が明かとなった。これは東屋のある曲輪の下の斜面部分の調査にも示唆を与えてくれる発見といえよう。蛇沢と桧木沢に至る斜面部分についても、沢に至るぎりぎりまで曲輪群が連続して造られていることがわかる。これは平野山方面から楯山城に来る道が蛇沢の道に通じていて、この道の両側に防衛のための施設を造成していたことを想定させるものである。千畳敷と称される曲輪の虎口は門跡が発掘されたので明かとなったが、それより下の道、つまり居館部分へ至る道・蛇沢へ至る道・桧木沢へ至る道が推定できる部分もあるが、十分解明はできていないのでこれは今後の課題としたい。

C地区の縄張については、東斜面の寺屋敷と称される広い曲輪部分を中心に縄張図を作成した。主要通路と考えられる蛇沢への構え、また桧木沢を越えた平野山方面への構えなどがかなり解明されたといえよう。ただ、寺屋敷と称される曲輪に統いて同程度の広さの曲輪が存在する理由はどこにあるのかなど、今後検討しなければならない問題も多く残されている。

## 2. 次年度以降調査の課題

### 1) 発掘調査の課題

発掘調査の課題としては、まず寺屋敷部分の発掘が上げられる。今年度は試掘で終わったので、次年度には本格的な発掘が求められる。曲輪に寺屋敷という名称が付けられている、その歴史的意味を解明する必要がある。発掘による建物跡・柱穴・殊に礎石・庭園跡・遺物等の出土に期待がもたれよう。

さらにC地区の頂上部分、八幡座と称される曲輪とそれに連続する細長い曲輪部分の発掘が待たれる。B（B1・B2）地区は南北朝期・室町期には築城されたものと考えられるが（その後何度も増改築はなされたであろうが）、C地区はそれより遅れて戦国期に築城されたものと考えられているので、C地区の中核部分にいかなる施設を設けたのか興味があるところである。

同様にB地区の頂上部分、八幡平と称される曲輪にもどのような施設を造ったのか発掘によって解明したいものである。

さらにA地区つまり居館部分の発掘も急がねばならないであろう。居館も南北朝期・室町期と戦国期ではA地区の中ではあるが移動している可能性もあり、それを確かめてみる必要がある。また居住空間なので山城部分から遺物の出土は極めて少ないのであるが、逆にこの居館部分からは多量の遺物が出土する可能性があり、河岸・舟運を支配する地方領主の生活の解明のためにも発掘には期待がもたれる。しかもこの地区は宅地化がすでに進み、今後の開発も予想されるので、発掘は急務となっている。

### 2) 繩張調査の課題

次には縄張調査の課題としては、左沢楯山城A・B・C・D全地区的縄張図を早急に完成させ、左沢楯山城全体の構造を明らかにすることが急務であることはいうまでもない。しかし調査人員の数の問題もあり、次年度においては、まずB1地区の南斜面の矢竹を切り払い、その後にこの部分の縄張図を探ることにしたい。この部分の縄張図を探るとB1地区の縄張図は完成することになる。つづいてC地区的山頂から寺屋敷方面つまり東側斜面の縄張図を探り、さらにC地区全体へと縄張図を探っていきたい。

以上、左沢楯山城の発掘・縄張図作成をめぐる今年度の成果と次年度以降の課題についていくつか指摘した。しかし、左沢楯山城の全体像を解明する調査研究は、上記した事項にとどまらず、平板測量による地形図の作成、古絵図・字限図・地籍図・文献史料や他の地域の山城の関連史料などの資料収集や、町民の方々の深い理解と支援を土台にした市民や研究者等による研究討論・講演等によってより一層進展していくものであることを明記しなければならない。

写真14 現地説明会風景



# 報告書抄録

ふりがな	あてらざわたてやまじょういせき
書名	左沢插山城遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	大江町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第2集
著者名	鈴木 熊、川崎 利夫、犬飼安太郎、譽田 廉信、大場 雅之、伊藤 清郎
編集機関	大江町教育委員会
所在地	〒990-1163 山形県西村山郡大江町大字本郷丁373-1 ☎0237-62-3666
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あてらざわたてやまじょう 左沢插山城	やまとたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡	324	324- 001	38度 22分 00秒	140度 13分 00秒	1998.7.31 1998.8.26	540m <sup>2</sup>	学術調査
せんじょうじき 千疊敷	やまとたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡 大江町大字左沢字插山							
てらやしき 寺屋敷	やまとたけんにしむらやまぐん 山形県西村山郡 大江町大字左沢字插山	324	324- 001	38度 23分 05秒	140度 13分 00秒	1998.11.2 1998.11.9	465m <sup>2</sup>	学術調査

大江町歴史文化財調査報告書 第2集

山形県西村山郡大江町

左沢城跡調査報告書

発行日 平成11年（1999年）3月

編 集 大江町教育委員会

発 行 山形県西村山郡大江町大字左沢882の1

印 刷 株式会社 若月印刷  
山形県西村山郡大江町大字左沢105